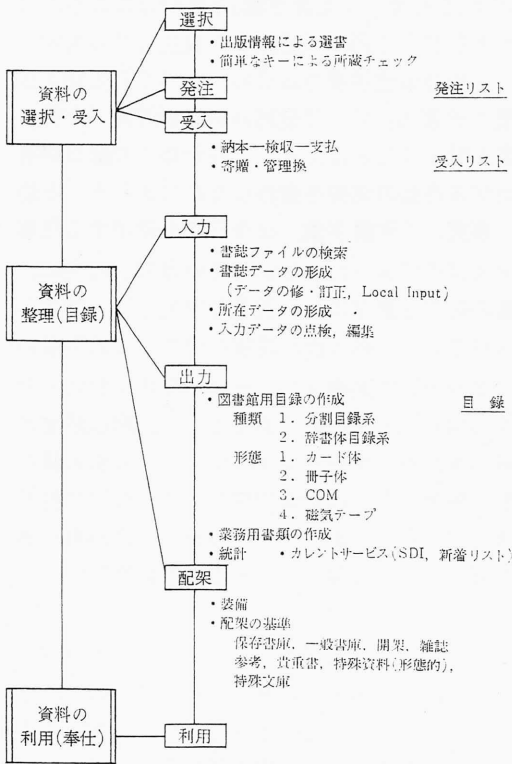
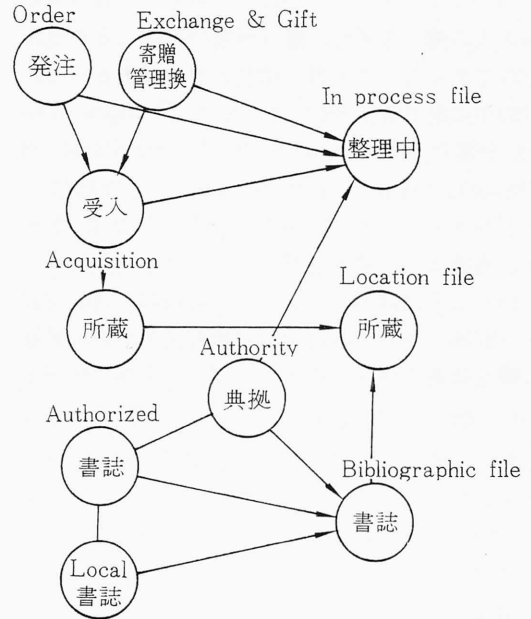


図書目録システム概念図



ことは、図書館（員）にとっても大きな意味があると言える。（以上）

図書目録システムファイル構成



美本「和蘭字彙」について

附属図書館 廣庭基介

附属図書館の新営工事を間近に控え、書庫内蔵書の移動作業をすすめるなかで、明治36年に建てられた旧書庫の一隅において、桐箱入りの新品同様に美しい「和蘭字彙」（全17冊、ゾーフ原編、桂川甫周校訂、安政2年 江戸 山城屋佐兵衛刊）を見ることができた。これと同じものは本学には、この他に13冊本と9冊本が本館に、また別の13冊本が文学部言語学教室に架蔵されており、「国書総目録」（岩波刊）によれば、わが国全体では29部の存在が確認されているのであるが、ここに紹介しようとする17冊本ほど美しい状態のものは稀なのではないかと思われる。

この江戸末期に刊行された蘭日辞書は、徳川家

の奥医師であった桂川甫周が代表となって校訂板行されたもので、校訂される前のものは、「福翁自伝」において、緒方洪庵の適塾の書生たちが、諸大名からの注文を受けて書写に精をだしたと記されている、彼の有名な「ゾーフ・ハルマ」にはかならない。換言すれば、書写によって流布された「ゾーフ・ハルマ」を校訂して印刷・出版したものが「和蘭字彙」ということになる。

周知のように、ゾーフとは、寛政11（1799）年出島のオランダ商館の書記として来日し、享和3（1803）年、27才で商館長に就任、文化14（1817）年に離日するまでの約17年間を日本でくらし

Hendrik Doeff (1777~1835) のことである。彼は、日本語が非常に堪能であったが、出島に勤務する幕府の蘭通詞たちの多くが、あまりにもオランダ語に精通していないために相互の真意が通じにくかったので、彼等の語学向上に供することを目的として、文化8(1811)年頃から、優秀な通詞9人の協力を得て、蘭日辞書の自作にとり組んだのであった。その際、模範とする辞書として、1729年に第2版が発行されていた François Halma 編纂の「Woordenboek der Nederduitsche en Fransche talen」を用いたので、この辞書を「ゾーフ・ハルマ」と呼ぶようになったのである。当時は、「道富波留麻」とか「道氏波爾麻」というふうに書かれ、これより約15年以前の寛政8(1796)年、江戸において稲村三伯がわが国初の蘭日辞書を作った時にも、奇しくも同じ F. Halma の蘭仏辞書に範をとったことから、「波留麻^{ッダ}和解」と名付けられたのを、巷間「江戸ハルマ」と呼ぶのに対して、「ゾーフ・ハルマ」の方を、「長崎ハルマ」と呼ぶようになった。

「ゾーフ・ハルマ」は編纂にとりかかってから5年後の文化13(1816)年に初稿が完成したのであるが、その頃、ゾーフの故郷はナポレオンの軍隊によって占領されていたにもかかわらず、幕府をはじめ、日本人の多くがゾーフたちにならぬ好意と協力をもって接してくれたので、その謝意をこめて、出来あがった初稿本を長崎奉行に提出したのであった。しかし、奉行所がそれを江戸表へ転送するらしいことを知ったゾーフは、当初そのように中央政府にまで奉呈するつもりではなかったのか、もっと完璧に校訂を深める必要を感じて、再び通詞たちの協力を求めて、第2稿の校訂に着手したのである。所が、ゾーフは、翌文化14(1817)年、その第2稿の完成を待たずに帰国を命ぜられて日本を去ってしまった。彼のやり残した仕事は、通詞たちの努力によって文政2(1819)年頃に完了し、江戸に伝えられて「ゾーフ・ハルマ」として書写により流布したといわれている。

このあと、「ゾーフ・ハルマ」は更に精密な校訂を加えられ、いわば第3稿本ともいうべきものができて、これを甫周が一家一門をあげて転写し

た上、それを底本として校訂、出版したのが、この「和蘭字彙」なのである。何故、甫周が「道富ハルマ」とせずに「和蘭字彙」と名付けたのか、杉本つとむ著「江戸時代蘭語学の成立とその展開」には、当時の漢学者をはじめ、すべての知識人から最も信頼されていた最高の中国語辞書「字彙」の名を冠することによって、自分たちの蘭日辞書に対する自負の気持を表わしたのであろう、と述べ、事実、「和蘭字彙」は今日でも通用する見事な出来ばえであった。しかしその自信とは逆に、本書の緒言と跋文には、謙虚な学究らしい文言が記されている。例えば、緒言の中で、この辞書の刊行を決意した動機は、ゾーフの長年にわたる労苦を万世に伝えるためであるといい、蘭仏辞書の作者ハルマや、マーリン(P. マーリンも別の蘭仏辞書の編者)などの先輩大家でさえ、校訂に校訂を重ねたくらいであるから、自分たちの辞書に誤りがないとはいえない、と不安の気持を語っている。

跋文では、この校訂作業に、弟の知春と橘堂、妹の香月、その他一門の社友全員が助け合い、協力しあって励んだこと、原作者ゾーフの学恩に感謝し、ゾーフに協力した蘭通詞たちの労苦に対しても思いを到す言葉を加えることを忘れなかったのである。またこの辞書を作るに際して、自分たちが楽しく学ぶという気持であったとも述べているのである。

板下からは数人の筆跡をうかがうことができ、蘭字にも多少巧拙の差が見られるし、中には女性の手と思われる部分もある。しかし、現今とちがって、ローマ字に親しむ機会など皆無であった当時としては、実にのびのびとした美しい横文字が綴られていることに感心しないわけにはいかない。稀に訳し切れずに白紙のままの語もあるなど、ほほえましい部分もあるが、今でも江戸時代最高の外国語辞書であると評価する学者が多いのである。

ただ、甚だ惜しいことは、この辞書の完成が、明治維新に先立つこと僅か10年という年であったことである。すでに新知識を求める人たちは、英学の方に関心を向けはじめていたために、作者た

ちが考えたほど活用されるにはおそすぎたのであった。

なお、本書の寄贈者は、江馬益也という人で、同氏は、本書と同時に、貴重な蘭医関係の洋書27点も本学に寄贈されており、それらの中に、江戸中期以後、名蘭医として活躍した美濃大垣藩藩医

江馬蘭斎の手沢本が含まれていること、及び明治24年になくなった江馬家の後裔で名医でもあった江馬活堂の本名が元益であること、の2点から、この「和蘭字彙」が本学に寄贈された明治33年当時の江馬家の当主であったと考えられる。

本学の蔵書400万冊をこえる

本学の蔵書が12月2日で400万冊をこえました。

明治30(1897)年6月、京都帝国大学の創立時和漢書:37,746冊、洋書:5,315冊、計:43,061冊の蔵書で発足し、昭和8(1933)年に100万冊、昭和33(1958)年に200万冊、昭和47(1972)年に300万冊を超え、今回、400万冊をこえたものです。

ちなみに、わが国では東京大学が501万冊、国立国会図書館が363万冊(いずれも昭和56年3月31日現在)(注)国立国会図書館は他に地図・レコード・マイクロ資料で約35万点所蔵している。)となっており、本学は東京大学に次ぐ第2の蔵書を有することとなります。

本学の蔵書の中には、内外に誇りうる貴重図書として、「近衛文庫」、「維新特別資料文庫」、「富士川文庫」、「中院文庫」、「谷村文庫」、「旭江文庫」、「清家文庫」等17の特殊文庫をはじめ、稀覯書も多くみうけられます。なかでも後世に永く保存すべき図書として、文化財保護法に基づき重要文化財に指定されたものが、37種168冊を有していることは特筆に値します。

このように質・量ともに優れた本学の蔵書は、本学の学術研究・教育・学習のみならず、全国の研究者にとっても大変有益な資料として、広く利用されることが期待されます。

— 資料紹介 —

大 山 文 庫

本文庫に収められている書物は、本学名誉教授故大山定一先生の所蔵されていた洋書(1231部、1451冊)を、くま子夫人をはじめ御遺族の御好意により、文学部が譲り受けたものである。

大山定一先生は、明治37年香川県琴平町にお生まれになり、昭和3年京都帝国大学文学部を卒業後、第三高等学校講師、京都帝国大学文学部講師、法政大学予科講師、京都ドイツ文化研究所講師などを歴任されたのち、昭和21年京都大学文学部助教授、昭和25年同教授となられ、以後、昭和43年3月に停年退官されるまで、文学部ドイツ語学ドイツ文学講座の主任教授として多大の功績をのこされた。また昭和41年から2年間、文学部長としての重責をはたされた。本学を御退官後も、関西学院大学文学部教授として活躍されていたが、昭和49年7月1日に御逝去になった。

大山先生のお仕事は、周知のごとく Johann

Wolfgang Goethe および Rainer Maria Rilke の研究や翻訳を中心として、ひろく近代から現代にいたるドイツ文学全般にわたっているが、本文庫に収められた御蔵書からも、大山先生の文学的関心の多面性と造詣の深さをうかがうことが出来る。したがってその内容は Goethe や Rilke 関係の文献をはじめとして、Gotthold Ephraim Lessing や Heinrich Heine に関する従来本学に欠けていた文献や、現在では入手しがたい19世紀末から今世紀前半にかけて刊行された貴重な研究資料が広範囲にわたって収集されている。

文学部図書室では昨秋この文庫の整理を終了、文学科書庫に備付けて研究者の利用に供しているが、7月には冊子目録の編集も完成して「大山文庫目録」を刊行することが出来た。ここにあわせて報告させていただく次第である。

(文学部・村橋ルチア)